



IUFRO-J NEWS

No. 17 (1982.1)

ご 苦 勞 さ ま で し た

第17回 IUFRO 世界大会も、長い長い準備期間でしたが、終ってみれば、一場の夢のようでした。各界にわたる大勢の方々のご支援を得て、この大会を持つことができて、誠に有難いことだと、しみじみ感じております。71か国、1539名に及ぶ予想以上の参加者を得、しかも、現地視察に697名もの方が参加されるなどは全く思いも及ばないことでした。これだけ大勢の方々、天候にも恵まれ、これと云った事故も無しに会議を完了できたことは全く幸運の一語に尽きると思います。

まるで戦場のような感のあった、京都国際会議場の事務局の様態を思い出すと、みなさまのご苦勞には頭の下がるばかりです。当然、研究討議で大活躍されるべき中堅の研究者の方々の多くが、事務局と云う裏方の仕事に忙殺されてしまったのは、全く申し訳の無いことでした。あのエネルギーを、今度は是非国際研究集会の場で大いに発揮して頂きたいと思っています。IUFRO-Jの次の仕事は、今回の経験を国際舞台に発展させることだと思います。

世界の研究者達が、今回、日本の森林・林業・林学を驚異の目で見直してくれたことは、皮膚で感じる事ができましたし、われわれ日本の研究者達も、大いに自信をつける事ができました。これは貴重な資本だと思います。

森林は世界の財産であり、これを守り、これを発展させて行くために、林業が必要であり森林研究が必要であることを確認し、これに従事することに誇りを感じた年であったことを会員のみなさまとともに喜びたいと思います。

“2000年の地球報告”を待つまでも無く、世界の森林はきわめて危険な状態にあります。今大会ほど、熱帯林業に関係する話題が数多く出され、論議も盛んに行われたことは無かったのではないのでしょうか。今回、本格的



に国際舞台に仲間入りしたわれわれは、今こそ、お互いに協力しつつ、世界の期待に答えて行かなければならないでしょう。

会員のみなさまも、今は静かに、あの忙しかった会議の様態を想いかえておられることと思います。会議の成果は、今後いろいろの場面に、少しずつにじみ出して来ることと思われまふ。スギやヒノキの林業を完全に理解してもらう難かしさを体験された方もおられるでしょう。それだけに、日本の林業には特異性があると思いまふ。私は、旅行中、狩りように関する質問を受けて閉口しました。或いは、森林の零細所有には共通の悩みを持っていることに意を強くされた方もおられるでしょう。

こんな体験が、今後のわれわれの研究に、少しずつ現われて来るでしょう。情報を交換しつつ、今回の体験を大いに活用したいものと思っています。

IUFRO-J 会員も多くなりました。大会後のわれわれの活躍が期待されます。

大会のご苦勞に感謝するとともに、今後のご活躍をお祈りします。

第17回世界大会組織委員長 松井光瑠
IUFRO-J 議長



リーゼ前会長からメッセージ

第17回ユフロ世界大会は終わりましたが、本大会におけるユニークな国際協力の経験、すぐれた組織運営、そしてまた日本の皆様との暖かい友情と、心からのもてなしは71か国から集った1539名の記憶のなかに永く残ることでしょう。

ユフロ-J ニュースの誌面をお借りして、あのように素晴らしい大会を実現して下さったことにたいして、われわれ参加者一同および世界のユフロ・ファミリーからの心からの謝意を表したいと思います。

参加者全員が、科学者として、1人の人間として喜び、満たされた、あのような大会議を準備し運営するために、どれだけの努力をされたかは想像に絶するものがあります。

エキスカージョンにも同じように強い感銘を受けました。専門的な視点と、過去から現在までの日本文化にふれることが巧みに組合わされており、しかも参加者に寛裕と相互理解のための時間もとられていました。

本大会はまさに素晴らしく完璧な出来ばえでした。われわれはこの大会を通して相互に多くの事を学ぶとともに、日本の林業に親しく接することができました。この大会でえられた多くの成果が、日本の、アジアの、そして世界の林業と林業研究のこころの発展に役立つことを切望してやみません。

現在われわれが手にしている研究成果の上にとどまることなく、明日の森林のためにより一層の研究を続けてまいりましょう。

W. Liese

IUFRO 第17回世界大会のあらまし

「明日の森林は今日の研究から」をテーマに、IUFRO 第17回世界大会が、9月7日から京都市室町の国立京都国際会館で開かれた。およそ5年に1回開催されるIUFRO 大会がアジアの地にやってきたのは初めて、会場には林業の研究にたずさわる1539名の人が世界71か国から参集し、5日間にわたって熱心な研究討議が続けられた。さらに13日からは日本各地の森林を巡り現地検討のためのエキスカージョンが行われた。

工業の発達、人口の増加にともなって森林に対する関心が高まっているなかで、現実には地球上の森林は非常に勢いで減少しつつあるときに、多くの研究者たちが一堂に会して成果を交換し討議を進めたことは極めて意義深いものがあった。

とりわけ東洋の島国で、欧米のように人の交流も少なく、言語等の関係もあって情報の交流も乏しかったが、森林林業に関する研究と現場でのすぐれた技術の集積が広く、世界から羨望されて、遠く離れた極東に予想外の参加者をえたことは、まことに大成功であった。

開会式には皇太子殿下のお言葉、そしてキョウウ竹のお手植もあり、また林業が重要な産業となっている東南アジアを初めとする開発途上国から56名の招待参加もあって本大会をことのほか盛大にした。

閉会にあたっては、リーゼ会長から中国・ベトナムなどの新規加盟もあって世界93か国・394機関、これに所属する科学者8,000人等々 IUFRO の現状の報告、さらに日本大会では東西間の協力を緊密にする一方、アジア・アフリカを中心とする開発途上国への技術伝達の場として、きわめて有効的な会議であったと述べられ、ついでこんな素晴らしい大会を開き、運営してくれた日本国関係者に深く感謝するとむすばれた。

最後に新任のあいさつにたった、D. ムリンセック新会長は、5年後の85年には母国ユーゴスラビアで開催することを報告し、歓迎のあいさつと、ユーゴを照会するスライドが映写されて、実り多き大会の幕を閉じた。

この大会の概要はつぎのとおりである。

長年月にわたって、この大会のためにご苦労された IUFRO-J のみなさまに心から同慶の至りとお礼を申し上げます。
(雨倉 朝三)

期日：研究集会 昭和56年9月7日～12日
 エクスカーション 9月13日～17日

日程：6日 登録、評議員会

7日 開会式 専門部会別集會、分科会、ポスターセッション
 レセプション

8～11日：特別講演（4名） 専門部会別集會
 分科会、ポスターセッション、評議員会
 （10日）

12日：閉会式 レセプション

13～17日：エクスカーション

開会式

開会挨拶：W. リーゼ IUFRO 会長

歓迎挨拶：松井光瑤、組織委員会委員長

皇太子殿下お言葉

祝辞： 亀岡農林水産大臣、柴田 榮 IUFRO 協
 力会長

「日本の林業」紹介：秋山林野守長官

基調演説

「明日の森林は今日の研究から」

1. サムセット前 IUFRO 会長

IUFRO 学術賞授与：7名

閉会挨拶

特別講演：大会期間中、林業が直面している諸問題に
 ついて、毎朝1時間づつ講演が行われた。

「地球の緑を守ろう」日米欧委員会日本委員長 渡
 辺 武氏

「明日の森林準備は出来ているか」 アメリカ山
 林局長 R. マックス・ピーターソン氏

「自立のための林業の研究と開発」FAO 林業局長
 M. A. フローレス・ロダス博士

「林業研究における国際協力」 IUFRO 元会長

J. シュベア博士

専門部会別集會：6つの部会ごとに活動の総括、次期
 活動方針、基調講演、勧告等の作成が行われた。

分科会：133の会場に分れて専門分野別に618編の研
 究発表が行なわれた

| 部 会 | 会場数 | 招待論文数 | ボランティア論文数 |
|--------|-----|----------|-----------|
| 1 | 20 | 53 (12) | 60 (10) |
| 2 | 25 | 85 (42) | 119 (10) |
| 3 | 14 | 43 (7) | 32 (1) |
| 4 | 24 | 69 (18) | 85 (28) |
| 5 | 26 | 37 (9) | 111 (27) |
| 6 | 21 | 47 (5) | 53 (5) |
| 1～4 合同 | 1 | 4 (0) | — (—) |
| 1～2 合同 | 2 | 8 (2) | 2 (0) |
| 計 | 133 | 346 (95) | 462 (81) |

() は日本人の発表数

ポスターセッション：この発表方法は今大会で初めて
 導入されたもので、研究成果を図表等で掲示し、発
 表者と参加者が個別的に討論する形式である。

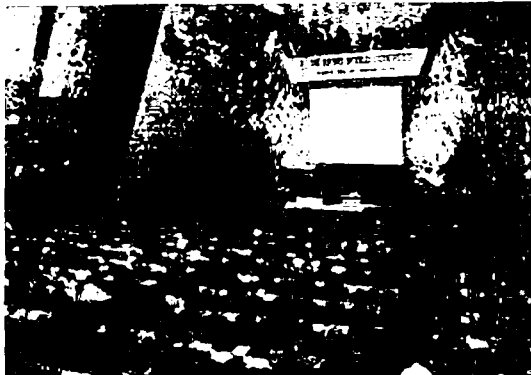
部会別の発表はつぎのとおりである。

| 部 会 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 計 |
|-----|------------|------------|------------|------------|------------|------------|--------------|
| 発表数 | 50 (33) | 80 (52) | 25 (17) | 19 (8) | 62 (37) | 17 (7) | 253 (154) |

() は日本人の発表数

その他大会中の行事：記念植樹、京都近郊の林業・日
 本文化見学小旅行、竹細工・出版物の展示、同伴夫
 人のための映画・生花と茶の湯実演、京都観光など

エクスカーション：大会終了後12の専門別コースと
 2つの一般コースに分れて、日本各地の林業・林産
 業と観光のための旅行が行なわれ、その参加者は
 697名におよんだ。



研 究 部 会

研究集会

IUFRO 大会の主要部分をなす研究集会は、9月7日午後から11日午後まで、9日午後を除く8半日にわたり、専門部会、分科会ごとに延155会場で行われた。すなわち、第1部会「森林環境と造林」部会では、部会集会で千葉宗男氏の「明日の人類のための造林」が発表、討議されたのをはじめ、7分科会で17テーマのもとに発表や討論が行われた。

第2部会「森林植物と森林保護」の部会では、部会集会で部会長 R. キャラハン(米)による第2部会の活動報告が招待論文として提出され討議された。さらに5分科会28テーマを中心に研究発表が行われた。

第3部会「森林作業」部会では部会集会で「明日の森林作業研究」(H. シュタインリン(西独)、U. ズンドベルグ(スウェーデン))および「小径混交林の地上バイオマスの非バルブ利用」(P. コーチ(米))の2論文が発表され討議された。

第4部会は「森林計画、経済、成長と収穫、経営、政策」に関する部会であるが、部会集会では「私的目標と公的目標に合う小私有林」(R. ブロッホマン(西独))と「地域社会の発展と林業」(J. アーノルド(FAO))の2論文が発表され、論議された。また分科会では5分科会で25のテーマのもとに発表・討議が行われた。

第5部会「林産物」部会集会では「北米の用材等級区分法と試験法」(B. マドセン(カナダ))、「北欧およびECEの針葉樹材の等級区分」(B. ツネル(スウェーデン))、「木材の機械による応力等級区分」(B. ベンツェン、R. ヤングス(米))、「構造材の等級区分の将来」(R. レイセスター(オーストラリア))、「林産研究展望」(R. ヤングス(米))の5論文の発表と、これをめぐ

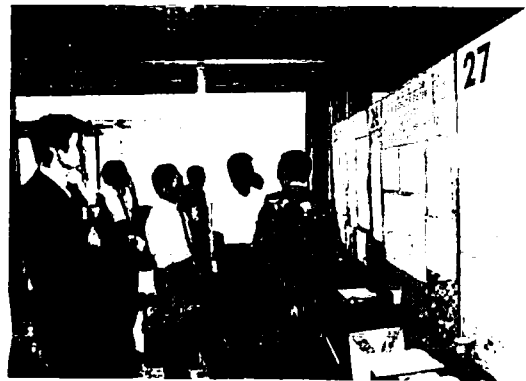
る討議が行われ、また7分科会で18テーマのもとに研究発表および討論が行われた。

第6部会「一般問題」の部会では、部会集会に「林業における技術移転」(G. メラー(米)、H. ハイツェ(スウェーデン))、「開発途上国における林業研究の優先順位」(J. スピアーズ(世銀・FAO))、「林業研究と情報—新しい情報技術とシステム」(S. シュレーダ(西独))の3論文が発表され討議された。分科会は5つで16テーマのもとで多数の研究発表が行われた。

各専門部会ごとの研究集会のほかに、いくつかの部会または分科会にわたる問題について部会間合同集会も行なわれた。主なものは第1部会から第4部会までの4部会合同集会および第1部会2.1(生理)分科会と第2部会1.6(熱帯造林)分科会の合同集会であった。前者は「林業自身に対する林業のインパクト」のテーマのもとに、それぞれの専門部会の立場から、S. ゲッセル(米)、E. ドナウパウアー(オーストリア)、M. ボル(オランダ)、R. ブロッホマン(西独)が論文発表を行なった。また後者は熱帯造林に関する特別シンポジウムであり、「熱帯地域における森林資源の現状と造林上の諸問題」および「熱帯造林の諸問題に対する生態的アプローチ」の2テーマでそれぞれ5編づつの論文が発表され討議された。このほか専門部会内での分科会間の合同集会もいくつか行われた。

以上のような口頭発表とは別に、ポスター展示による発表も行なわれた。ポスター展示発表はエフロとしては今大会ではじめて採用された方式で、研究の方法や結果の概要をポスターにして展示板に貼布し、1話題1半日(2時間30分)展示発表した。各研究者は興味ある話題について、発表者と資料を見ながら直接詳しく、突っ込んだ討議ができ、なかなか好評であった。

このようにして発表された論文数は、招待論文330編、ボランティア論文257編で、このほか時間の関係等で発表



・討議には付されなかったが大会に提出されたボランティア論文も200編以上あった。またポスター・展示発表された論文数は248編であった。

これら研究集会における研究発表はテーマごとに、1ないし2セッションで行われた。

セッションは半日(2時間30分)を単位とした。テーマごとに原則として1人の座長があり、セッションの運営はその座長と、セッションごとに指名された日本人研究者による座長補佐とによってなされた。座長補佐によってセッションの運営が詳細に記録された。

その他の集會(サテライト集會)

次のような集會が大会会期中に行われた。

○IUSF: 活動状況の報告、論文発表・討議

○IUFRO/MAB 合同集會: テーマ1 熱帯林の社会的価値一認識と心構え。テーマ2 都市林研究—新しい認識と概念、以上について論文各3編づつが提出された。

○国際木材解剖学会、○国際木材科学アカデミー 以上2集會が京大会館で行われた。

○IEA: 活動報告が行われた。

○IIASA: 活動報告をポスター・展示で行った。

(片桐 一正)

エクスカーション

事前に行ったエクスカーションに対するアンケート調査の結果は、かなり好意的なものであったが、エクスカーション参加費は、6万~15万とかなり高くなったため、参加者が少なくなるのではないかとエクスカーション担当者は、一抹の不安をぬぐい切れなかった。コースは、12のコースが林地肥培、亜寒帯林など専門によるコースで、2のコースが林業一般のコースである。専門コースでは、専門、林業一般、観光その他の割合が3分の1程度になるよう組まれている。

会議が近づくにつれ、次第に希望者が増加し、2つのコースは2台のバスを使うことに決定した。それでも、当日受付では第2、第3希望のコースにゆかざるを得ない外国人参加者もかなり出る一方、日本人の参加者のなかには、自発的に参加を辞退する人もいたほどであった。

しかし、エクスカーションの登録事務は、J.T.B.のベテランが担当したこともあり、たいした混雑もなく終了した。

9月13日の第1日目の出発は、各コースとも、新幹線

近鉄、飛行機、バスなどに分かれて開始された。重量のある荷物は前日に指定のホテルの場所に各人が届けておき、トラックが別送するという形式が取られた。このトラック別送のシステムは外国人にとっては、おそらく初めての経験であったと思われるが、トラブルもなく実行された。むしろ、ホテルにつくと、いつも各人割当の部屋にちゃんと荷物が届いているので、驚異の目をみはった外国人もあったと聞く。

第1日目ほどのコースも、コース役員の紹介などに始まり、コースガイドブック(コースの日程や現地のポイントごとの説明資料を綴じたもの)に従い、プログラムを実行した。

現場での各ポイントでは、普通、地元の大学、営林局・県庁の人などが説明を行ない、その後、多少のディスカッションがあり、コースによっては、外国人参加者の代表が、説明者に対する返礼の挨拶を行うというのが一般のパターンであった。しかし、ときには外国人参加者の希望を入れて急ぎよ、予定のポイントを変更するコースもあったようだ。例えば、東北のコースではヒバ天然林など天然林のポイント説明が多く予定されていたが、バスの中からみたスギなどの人工林に多数の外国人が興味を示し、もっと人工林をみたいという要望が起った。そこで、コースを若干変更し、現地説明を行ったところ、議論百出したという。

また、コースによっては、室内でのポスターやパンフレットによる説明よりは、山の現場をみたいという要望が出て、現地見学に切り変えたコースもあったようだ。他のコースのなかには、分きざみの予定を正確にこなし、外国人をして、ミリタリ・エクスカーションと言わしめたと聞く。

専門以外の観光の説明は、主として、バスのなかで、J.T.B.のガイドが行ったが、どのコースもこれが非常に評判がよく、あるコースでは、J.T.B.のガイドに別れる



とき、涙を流して感謝していた外国人もいたとのことである。このガイドに限らず、歴史や由来などをおりこみ、わかりやすく、地元の産業、文化、生活様式などを説明してくれたと思う。

各コースとも1～3回程度の知事、局長主催のレセプションを受けている。いずれも豪華な料理で、コースによっては、地元のおどりを含めたアトラクションのあったところもあった。地元の民芸品などのおみやげをいただいで喜んでいて外国人も多かったようだ。どのコースも最後のサヨナラパーティは、皆うちとけて面白かったと聞いている。

J. T. B.の人によれば、全国的に14ものコースを組んだエクスカージョンは始めてであったという。細かい点をいえば、反省すべき点は多々ある。例えば、外国人はとくに公式のレセプションでは、きちんとした服装で出席する習慣があり、そのあたり準備時間や服装の用意に非常に気を使う。あるいは、コースに無理がなかったかどうか、バスの中で昼食をランチボックスで済ませる日が続くことはなるべくさげたいと思う。

一方、日本式の旅館に一度くらいは泊まるのは、思い出になってよかったとき、しかし、日本式旅館は、一般的に値段も高く、敬遠したコースが多かったようだ。

最後に、何よりも大事なことは、まがりなりにも、われわれは外国人のお客さんをお世話し、ともにディスカッションなどを通じて共同生活をしたという経験と自信をもったことであろう。

若い人の中には、かなりの自信をもって帰ってきた人もある。この経験と自信を大事にしたいものだ。

(西川 匡英)



INFORMATION

★本部新役員

第17回ニフロ世界大会期間中の評議員会で1982年1月からむこう5年間の本部役員が選出された。会長は2期にわたって DIVISION 1の部会長をつとめられたユーゴスラビアの MLINSEK 教授、副会長は米国林野庁副長官の BUCKMAN 博士で、9名の地域代表理事の1人として林業試験場の浅川澄彦博士がアジア14か国(アフガニスタン、中国、イラン、イラク、パングラデイシニ、スリランカ、インド、パキスタン、フィリピン、日本、韓国、ネパール、ベトナム)を代表することとなった。

★次回理事会

次の理事会は、1982年4月20日～30日の間新会長の母国ユーゴスラビアのライバツハ(リュブリャナ)で開催が予定されている。

★EXC 部会コーディネーター会議 8月10日

1. 事例調査結果について
2. EXC 資料の作成について

★研究部会 Japanese Aid 会議 8月18日

1. 研究集会運営について

★組織委員会・運営委員会合同会議 8月25日

1. 大会参加者現況
2. 大会プログラムについて
3. 研究集会準備状況
4. EXC 準備状況
5. 執行予算について
6. その他

★協力会・募金委員会合同会議 8月26日

1. 募金進捗状況について
2. 今後の募金活動について
3. その他

★班長会議 9月24日

1. 大会記録整理について
2. 各種報告について
3. その他

★各部会は残務整理のため逐次会議を実施する。

IUFRO-J NEWS No. 17

昭和56年1月25日

編集：国際林業研究機関連合—日本委員会事務局

発行：農林水産省林業試験場